



5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3

南嶺子卷之四

秋齋桂先生著

松尾守義  
山中秀蕃

同校

○猿樂といふより神樂の餘風として舞の家つゝ割のとある。申樂といふが、此說より一説あり。又神代奉不。猿女君祖天細女命。神樂を棄め一事なり。猿女氏うる舞いぢやう名ふりて。猿樂と云ふの説もあり。跡れど禁祕抄中巻可遠元賤事條曰。況如猿樂參庭上事也。○明月記寛喜三年閏二月十三日己酉至子建久下衆猿樂被召。先に無ヨラタキ充セガル。カクシヨロセタ。仍只可召侍猿樂由所申也。下立猿樂承上高見と數世家業と云う義ぢや。侍猿樂と云う一つもそく人の魁藝すと。家業をうまきのゆことてあり。神樂をうじり。もうう丈あうびきや

清妙納ての枕巻紙をより儀ふすととのをちと正體もあまうき  
とのことをやつて。宇治於達あ達ふ。御神樂のまよちひく儀ふす  
さうとあつと見るも。樂八兄弟尾とまつてつきあるせ。ばくとせん  
とのをゆめり。それを唐の散樂とひそびて。卒役を  
辛夷のびう輕飛をどまことのる。散樂の音移じて。サルガクみう  
さうや。今後と称し。うもとをうちづかむや。文章時代をわゆる。  
古語成語をちがて。かくらうのねあむりて。章譜第を正し  
歌笛相手とくらう。千里同譜ふと。見空の人をして。嫋うす  
がく。古と今と將變かくのとく。貴賤に掌すの本紀更ふ害か一  
○にゆ麗せり人のひるうき。高砂とゆる舞曲を親父小松の精と  
尼へよ。

りひかく腰小梓のうともうまで。まゆとて松の落葉、をまかづく。あ  
もももきてひ長せず。それを取多一の詠不似う。ゆを賀岸より。是と用  
人や。とぞ。豈貴ぞ。利と先ともうむづく。湯ひとくね。壽と。お  
きの太極と。利と欲も。ちぢい。能大人のも。あそびゆと。身一も。そ  
尼へよ。

(一) 唐の魏徵天子が奏して。仰て臣等て良臣と。うて忠臣と。う  
ゆすと。それと。のと。誠よ其臣。ち遠と。ゆうと。圓のが。主君雖  
みあふ。よあふ。れど忠臣を。あむれば。孔明正成。八軍。非死。豫章。良雄  
君の仇みたて。夢よ忠烈あむ。もと。と。圓。舞。み。毛。安。ま。か。年。常。日  
と。ふ。それ。忠。長。と。あ。く。れ。と。清。毛。君。の。改

古事記傳  
魏徵傳

○ まうりの内。は戸へゆくと駿河國吉原とりよ西。度きに長藏とよ豪農のもとにて十日又四日も逗留たり。長藏元なし。すゞしく学問を業せ東、涯先生より受書法を廣津公翁よ学びく。屋後み一室をひき。書を讀んで閑と娘ふよと弓馬の故実をとがうあひて。一日富士櫻見む。またちれせ之川苔布臺うかうみ休にて。宿毛氏ひづるや。富士桜見もく。嶺のがう時あり。終宵みのがう寒夜よましわらひ。お舟坐とれ未途もそかよおうとふ。まくじくねじらもと観も勢至の三月の申

もあらずとやうへりま。先年のがうて以來とすまほを、先  
月の山のまよひ。お背せのむのちうのねらへり。もと  
内よ三きよもつゞけ。月の内よりやけにたんかうりみやびよを  
あそび。あやとくもとあじと。あくまき考てうめづる見  
む。三きよもつゞけ。よそてあねりえ二きよもあや。そそそうがうじのうづふ  
ゆそ。日ふ映す。とうやくあやしくる。もとを有りとむねりま。高  
の木のうち方よみて。ほどゆづとくわ。じくせらふる事。  
まづいかけきと石も佛とがまれ。まづくみを捨しも山城す  
人のひもべりやび。

○古寺テラシ、久間魔王の下サマトヒキ。おわづ。是とて、けど。極手ヨウジアリ。信

と成り。其下と云ふ木下にて多く。壽の字福の字なり。おはふ  
みの二ナあつてそしも。いもうかくを多く。先に駕れまよと云ふ。  
海とをす。とそつてひゞく徒々。又に殊院如来の山下丈にて是も  
極あくまう。あふ僕とおでいざぶもあく人の苦惡きよよらまび。仙法  
のあう。看ても信もあく。あく人の苦惡きよよらまび。仙法  
あく。や。極木の東門を相模歌辭はくの園口と同じ。ありや。今世の  
かさ邪智ふ。撫か人多まゆ。惑まちてといよ。すまへ。一向流。平家  
物語。み。圓覺王のもと少く法事。八瀬。あこまくして。供僧一人。ば  
とて。桂樹圓清院寺の住持。慈乞方。善と。五。五。實官の草書  
み。年号。ハ。大月辛の年号と用ひ。也。獄極樂。大月辛の麾下

とぞく。慈心坊冥。すうゆうて。ごく。清覺。うやうと。あく。かふ。その  
附。め。來。や。の。圓。の。下。と。よ。わ。今。お。御。ま。せ。侍。れ。の。そ。と。ぶ。り。下。け。無  
人。く。も。極。あ。を。を。く。を。極。善。と。極。す。け。安。善。あ。ぐ。で。可。く  
○阿。那。か。理。と。求。て。悟。り。と。む。き。ち。と。知。ら。思。ひ。ほ。中。に。理。と。三。才。で  
格。物。致。知。か。く。一。心。無。天地。の。限。す。人の。智。え。限。あ。う。水。の。流。れ。六  
歩。う。わ。と。の。見。を。何。ぞ。善。か。三。え。る。か。と。お。ん。や。ほ。と。善。が。る。と。や。う。て。だ  
け。手。下。手。

○無。の。れ。世。吉。水。安。吉。手。や。け。り。今。正。業。と。の。は。源。顯。く。ら。す。僧。人。五  
條。坊。門。鳥。丸。東。入。處。う。東。レ。ア。リ。ア。建。院。源。顯。後。小。松。院。の。御  
先。と。蒙。る。す。く。切。紫。衣。と。知。り。ぬ。き。よ。う。育。人。も。紫。衣。と。す。

卷之三

卷之二

すとあふき。又旧記み建業福市とあり。づれの附より。検校とある。高  
とひよ名肩ニヤウモクとももと來りて。むしとハ殊コトちろう。  
○平宗盛タイラムタモリコウの記アイ  
大夫師時卿セロトキモウの記号長秋記ト  
みほヨウ女ヨウ々ヨウ万ヨウ乃ヨウとのそらく方タタ。桂クシ井イ院イ等イ  
やうくいぢれと。ゆや桂ヨシ井イ院イ等イ方タタ。おなみゆとよきあり。謡曲モノも  
その説モリよき。びへとスルうち。がふも女ヒメの名ナミ也カシとあふくもさざ  
めもあひ。

○一とぞ越の敷室あそび。今寄り新田義貞のまこと  
塔、壯みて風景繰小よぐれ。八月十五日、おとするを上宮ハ海の  
れりそ二十五六町もさう門人古方を詠歌。ロウエイ  
ハイタナハ

梅摩のあふきてのきう。育人。すみ初うら。海としよ字。すむ。訓。いづ  
あくやもひー。青ハカイ。讀。ミ。ウニ。とりすりやハアレビトヒ  
シム。徳育人。あざつまじて。海をとろび。海月をうけ。海人。をあま  
海苦。とつ。海角。とす。モドヒモハ。エ。モ。グ。ト。ア。モ。ゾ。モ  
ナ。モ。よ。モ。聲。あ。ふ。ハ。ビ。ヤ。ア。リ。モ。モ。タ。モ。タ。モ  
今。ま。ざ。ハ。站。ハ。う。と。そ。や。モ。ね。ハ。う。と。レ。ハ。つ。の。う。と。モ。更。ふ。益。あ。  
○可。成。説。小。主。水。モ。モ。ド。ト。ト。ア。掃。部。を。カ。モ。ン。ト。ヨ。ヒ。モ。リ。う。  
レ。モ。モ。動。ゲ。ト。ト。ア。ス。ト。ア。主。水。司。モ。ト。モ。タ。リ。大。わ。の。居。モ  
ヨ。モ。不。ア。リ。取。小。雑。モ。主。水。司。モ。ト。モ。タ。リ。大。わ。の。居。モ  
取。小。雑。モ。主。水。司。モ。ト。モ。タ。リ。大。わ。の。居。モ

より起りて。さるを海をゆくと。そぞりて御簾をあらまう。  
とちひの下より蟹守とよ名起り。後於小掃除の友号とす。  
掃除を力モンとよむ。具とハカニモリ略してハカモシちうふ細妻を  
ち。何をきのうけあはれとひもんや。かくさる。太辨と於保伊於  
保止毛比中辨と奈加乃於保止毛比とよまやうち。たわごめいの判ハ  
いぬうゆめや。官名の一つの雅をう。人參の和名。加乃仁介久佐。高  
久末乃伴とあり。以上ツ人參をうまのいりよす。ツバメ。御膳とある  
ましや。甚あやしむ。

○ 予せ入八九月の時。和泉守方房。和田一也。かて。わく。東上や。す。  
タカシ  
ハ  
トホ  
タタキ

の。船ありとひて牛角ウツヅカよりを寄車シキチと號して。主も、あらわ  
人ヒトをばりひどいが。猶ヨリ々蛇ヘビを引くをかへとうれ。蛇ヘビと猪シバの喉ノドよく  
アベキモ多よらき。よよりうべ。蛇ヘビとうゑもあうべ。びとまもと三  
と。馬ハシマの口ヒトツと猪シバやぞともびく。蛇ヘビとすもかくしげ尾テと次猪シバのよら  
をまでうけ。猪シバのすもかくしげ尾テと次猪シバのよら  
のよもひに付タタキ。うきとまきて走りぬ。猪シバをくさりまして走りぬ。殊コトよほ善  
戰タガ者ヒト求シ之於塾シラフ。未ミだも未ミだも。其後孫吳シムヨイ見五卷ゴンジンを著シテます  
魏蜀安ヒヤマスル篇ヒンを立タチて論ロシト仕シテります。

○ 菩薩大相國ノ命アリケンモ大宰権仰ム縣佐ノキテ天台石窟主法性房  
シイヅクヤウタヨン ハリス  
シニモ僧正多年ハ文深キモ比肩山より下ムサヘサムサムアツメノ脚遺體

此をことかきとおもひをゆきと二あす。所をありては、代客として、松並の  
観み事まう流をあわぬ縁のゆゑとあひて、坐とて、らむ。画像が  
硯をもとぐらしく修正へ替へり。その畫影觀ももれ、梶井宮の寶  
庫ふけり。今、境内の社の神像、是れあり。サヨ、官公自畫の像といふ  
あらず。行そ多く、也傳へゆべしや。うつすきゆ縁ありてこそ、けり。  
也。予彼御所よりて、神像をもねり。けりやく。誠よろび。感應  
タク至るの也。蓋をべて、藁蓋小窓一扇にて、也。謙儀の  
心をうといむれど、思ひ。去年新造のあれ、さへして、神威も  
すくよつけ。況とほゞや。廟口をうしなひ。詳定もうけ。維摩  
院已講の日、山王の社小廟口をうけて、常安寺正院の拂を拂き上むくる

めく不律の僧ありて、山と誰故もう附。鉢端をおひて、立ばせゆき  
藝祐小廟口とおひて、歌山法古東よりの、或ちり。やで、廟口をうけ  
らんやうて、経よきを兩り版。後日小圓槐釈と梅もうちの詣社比、鈴奏懸  
鈴曳。完啓白其社氏人退其地不再歸心。次時叩廟鉢爲近言。此故神入  
有犯罪放于他鄉時。其人叩之立不可歸入於神地之盟。神人  
僧侶殺よ忍らと追却せし時。廟口とのれうちをもと叩きて再び  
きの折り盟を立てるべし。諸行説もろんこひよらう。す  
あづきよみと傳へ。

○疱瘡を胎毒の忌とす。古より膿瘡先生なり。かど諸行まく  
あれど。甚父母夢よ痘鬼を感ト。つかねぬ童を教めをうき。あやき

まきをまきめのむらへ。す新町二條の下に住み。傍かへふ小田氏の入  
り。ありまくもうまくひるどい。おがまき。齋すまうりう。詠て曰づ。父の  
伯父但馬國氣多郡。伊福村そ。小田正信。博つてハタラ。三人の子。あ  
皆幼少。かわゆ。ふ翁のふ瘦。よろそよ。もと大。學。けりへと金。夜。よせ  
がみ。りう。大。學。くよ。せ四。五。町。も。ひ。す。ま。う。處。す。て。墓。原。り。い。ぞ。初。観。の  
名。と。か。ふ。き。あ。い。ば。は。居。居。り。よ。よ。も。と。観。屬。け。り。と。墓。原。を。望。ふ  
ゆ。お。洋。す。か。く。ゆ。く。れ。う。お。の。望。す。よ。う。よ。う。ち。もの。お。大。熱。半。、先。も  
か。太。壁。く。ほ。ん。の。そ。他。く。り。ひ。瘦。す。ゆ。く。と。あ。く。や。ぐ。そ。果。、う。お。の。お。  
二。家。そ。う。ゆ。く。ね。り。す。よ。お。お。瘦。瘡。生。て。大。熱。半。、先。も  
も。あ。お。ひ。て。成。人。の。よ。、お。お。め。け。り。と。り。お。は。け。居。は。く。口。禁。

い。あ児もでにばくをと取むるくかねばすもなまうすひある。のうううち邪めらともよ刀ふくへんとなひよどりやうてものとお  
挂異カガミのうへ入力とゆき。げ切ゆさんとやみ。小兒コウニもちく声コノをぐでり  
せうゆ。ときえりてし子コノコを安穩コシカニをうへん。だしけりやまづむ母モト  
くふとぞとうちゆ。だらすら熟コツもうじらき。ひ弱ハヤイふ令狀ヨウザイセ  
ト。その時トキのあつまぬ父アツマハタケとトシ。代シテ一人ヒトのあつまくアツマクするも徳カタく。情力ヨウリ  
れレ井イシとトシゆ。きるゆき。醫人シヒンに掌ハタハタふくらカク。天テ地チの妙ミをう  
きこく。人ヒト其シ手ハタハタとトシあまう。小除コロハシ夜ヨよ痘カミの神ミコトを爐ヒサフをうけ  
媚モテるよのく。其シ嬖モテ兒コノコ熟コシカニ生スルく痘カミと尼ヌメやうや。辦ブをうおり倍モツめと  
列スルは。故處モトツ年イフ。明神ミヤコは侍スルう。此コト礼敬モツケイのありまへ。事コトども

通鑑

卷四

卷

ふ其児を侵よ至る。大モニタリヤウノ量の君子あつて。痘鬼と繫る本と繫ド。密  
もよきと敵セド罪モ充盈。道ナシモ。痘モヤリモ。鬼モ侵バシ。モ  
モ善人全モされと敵シ。れど甚れよ報。愚惡の人モ。是と敵シ。モ  
敵シ。家。ゾ。驕慢。さうり。ム。不。う。ム。ト。邪靈モ。敵シ。ト。人氣。モ。引  
張行盛。ム。うちの。既。ト。ゴ。テ。痘鬼。モ。ア。ヒ。ヤ。且。是胎毒。の。ミ。ト。シ。モ  
理儒考流。の。説。ノ。既。モ。痘。モ。ア。ヒ。ヤ。且。是胎毒。の。ミ。ト。シ。モ  
胎毒。モ。テ。キ。モ。ア。ヒ。ヤ。且。是胎毒。の。ミ。ト。シ。モ  
あり。酒。との。食。を。求。ヒ。リ。ト。ど。敵。シ。テ。ア。ヒ。ヤ。且。是胎毒。の。ミ。ト。シ。モ  
モ。賤鬼。モ。尼。伏。ヒ。嗟。呼。シ。ト。モ。ア。ヒ。ヤ。且。是胎毒。の。ミ。ト。シ。モ

小名す。うろこ牛仲とひい。優曲の者も。刀互に畏れ色。密と生じ。  
是を秘り。と和物。ふりて出ぬよ。よくかりて其。せよをあらわし。又等の  
手術。ふ妙。あり。医人あり。高麗薬。鎌絆。と。等の。手。色青く。なり。豊き。身  
甚。し。當田植氏。坐て。但馬山。石。よ。處。め。も。刀互に畏れ。是を視る  
蛇鳴。の。多く。み。が。ま。ど。へ。人。あり。も。ど。あ。う。し。づ。新説。を。走。く。ば。せ。れ。を。集  
の相畏。と。理。も。あ。う。ざ。れ。る。ゆ。や。

○續日本紀  
第十四天皇  
和銅四年の文と云ふ後文  
穀より殊とあり。省併小五石七斗を奉  
り。諸侯の貴きよりか重きよりか  
以て給奢るより以て。食ぬを一とす。而  
省併も免百  
○天照皇大神を朝家の宗廟す。公卿百官  
といふ。れよ矣。

まねり。延喜式。皇后。天子。大。小。元。れ。幣。物。と。上。下。と。ゆ。ま。もの  
禁。あ。い。そ。ん。名。賤。民。を。て。宮。社。小。駁。近。し。の。非。禮。と。い。ん。百。練。鉢。第。四。日。  
長。元。三。年。八。月。五。日。召。問。祭。主。輔。親。去。六。月。荒。祭。官。託。宣。之。趣。申。云。齋。宮。  
頭。藤。原。相。通。妻。宅。内。作。大。神。宮。寶。殿。詐。假。神。威。誑。惑。愚。民。其。罪。已。重。  
早。配。流。者。八。日。相。通。配。流。伊。豆。國。妻。比。賣。古。曾。流。隱。岐。國。云。後。共。巫。覡。  
等。私。私。是。と。家。小。祀。祈。禱。と。神。威。と。售。と。よ。とい。ん。や。度。人。の。家。内。  
み。天。照。大。神。八。幡。大。神。等。れ。天。子。の。祭。場。と。ゆ。侵。汚。の。替。上。と。す。ま。ら。  
西。の。至。極。と。り。ぬ。べ。ー。

○ 土。左。圓。赤。忌。と。り。處。小。安。忌。源。之。節。と。り。巨。商。あ。う。手。ふ。從。ワ。く。  
算。術。を。學。ぶ。圓。小。詰。り。つ。ら。家。教。代。事。事。と。り。ふ。薦。め。と。ち。

度。か。寛。の。厚。う。山。伏。出。く。あ。れ。と。り。因。よ。消。失。う。す。に。代。ハ。生。れ。た。是。  
その。始。り。と。う。も。と。う。ひ。掣。す。而。老。母。い。と。づ。い。飲。食。と。と。う。す。を。  
十。に。み。り。め。て。次。を。す。み。り。起。卧。ひ。よ。ゆ。と。び。秋。護。の。者。の。い。す。も。眠。小。就。  
を。つ。そ。て。ハ。こ。や。さ。く。立。て。ほ。う。小。眼。を。ぐ。う。と。ま。て。又。ほ。ち。ま。と。て。す。あ。う。そ。  
写。い。き。を。も。つ。ち。ち。よ。り。出。一。も。く。け。か。つ。く。ば。め。ち。歎。か。内。あ。ど。う。き。  
う。あ。ぐ。ま。て。乃。ク。る。門。衡。と。す。の。よ。わ。て。出。行。す。と。そ。く。あ。る。是。と。海。急。ふ。  
ゆ。そ。そ。乃。ク。る。草。履。と。神。と。捨。玉。を。き。と。入。水。せ。ま。と。ぞ。の。日。を。忌。月。と。て。  
同。一。そ。ま。じ。は。是。其。子。あ。れ。で。供。経。す。あ。び。や。う。の。る。多く。ハ。机。裡。の。表。  
し。ご。そ。り。彼。瘦。庵。の。繁。花。小。あ。さ。じ。て。脂。中。小。あ。つ。内。其。母。憤。と。費。う。れ。

○野狐を敬ひて。猪生の神號を潜り。福と祈り。慶と歌ひ。頑鬼の近  
夫。夢ふ甚多。一。また。野狐小豆をて。家。手術あり。も。人。うて。獸よ。

のうへとてきざわの下ふ引あひふ。是をなまて信ひ。後さげたるは  
一等アムツクニモ。あまゆくじや。

○近年神名者よりもの出来てその門前とあるもの命号を以テ又其  
發名の下づてをもと名づけ。持衣洋衣をもとせゆれ。その謝礼を矢原  
みて神と售る。頗の和名故ふも盜賊の首を列。義あむ事も。が如  
く勢り天子より命魯ももまく人情を以命と称すや。たゞ米の子と並  
てねだ。神名の方と林立を名づき。豆腐をの二番セトナ。計數財  
松川左京と号をうをのを伏をす。吳振から次もよそち。鳥帽子と  
ひどき。つぶ家かむすれとす。顧にすまうの室太朴等ひむよく  
金兵にてアラベーブの替を多く表向の人す因りてすまば。その鳥帽子

洋衣も町内の出合をさり少もよび。宮徒集落もあらず。御内を移入とづ。  
喜向もどりてね鳥帽子とく。歌舞伎のじくじくら。向ふの跡と傳ぐ。あ  
他のころ西をねだり。ひづる。かう非れを。神子れられとす人々。寧ま  
てよあとも。桓武天皇延暦十二年四月朔。内子文曰制。自今以後年分度者。非習  
佛道部。桓武天皇延暦十二年四月朔。内子文曰制。自今以後年分度者。非習  
漢音勿令得度。云。吳音を訛謬多く。經意を誤るれあり。即ち桓武帝の詔  
あく。佛經小吳音と稱せし。萬世の通訛あり。佛徒舊襲とある  
きいひ。吳音と以て經と訛謬するハ朝制より。唐國子  
祭酒李倍利語とりよちよむ。吳音あやまつ多く。上聲を古聲と。古聲

上声とももの辨あり。日本紀略より近暦十一年十月。儒書ハ漢書小  
よもやくの勅あり。それで儒書佛書より小品真と用ひ。故實ふこそじり。

○仲尼衛至る。靈公夫人南子小召にて。仲尼曰。吾行の無  
名あり。而後ひゆきて。門人之路設びて。仲尼曰。よ。否  
を所の者あるを天厭之。天厭之の諸あり。柳下惠ひう寝ふ。美  
女一宿と請。ゆうて。仲尼曰。仲尼ハオあり。汝  
よりの門人ト。あらびべて。矢とそ。柳下恵も才をも。學も裏人疑さる。  
聖人よりて。門弟子ふ。天きのちひき。即ち聖人をもふ。  
後世の傳者の固执とも。誠は天淵たり矣。

○大坂小斐仲となり。ありて。和方の学小達。一萬葉集代述記古今  
集。集材集百人一首改製。和字正濫原中拾。川辻雜記。勢語。勝  
詮。と始教経の書と著し。先達不鄙の語を云。一。古入未登の。我にと  
ひよせ。舊日文。又徵。と取。後序の。番語。とを。多。一千載の  
一人を。多くの。むかふ。萬葉と以て。主。と。後世の。名。と。徳。に  
あれ。わき。其時代。あるもの。少。當時新拾。遠源の。風。を。用。し  
が。如。く。集。と。撰。ア。内。且。筋。の。人。の。方。も。然。ち。が。あ。り。て。も。内。の。風。も。あ。る。  
ね。ど。そ。の。集。み。へ。ら。れ。ば。ま。と。古。さ。少。く。も。当。内。の。風。を。や。う。と。不。入。る。  
と。あ。ん。ひ。や。ど。よ。そ。こ。う。を。き。う。と。出。し。て。も。時代。の。風。を。こ。き。と。ゆ。く。用。ら  
き。す。と。祝。と。さ。く。太。方。の。萬。葉。集。と。準。繩。め。と。後。の。主。と。織。ち

そいしん。杜預トヨウ、小左傳サツデンの癖クセなり。樊仲ハニウ、小萬象シヨウジヤウの癖クセあり。樊仲ハニウを、  
學ガクの達人タフジンと仰カタマリす。言過カドウのをきくと、ハリヅケハリヅケざう。

八十八

○得長壽院トクチウイエン今も三十三間堂サンサンケンドウとよひて大佛堂タウボウドウの南ミナミより。其様  
材キ一本の柳ヒバの下シモに太オホもありあらず。其実否シラレハアリ。又もかくてハアリ。せんとを、  
籠ウタカ入スル。人多ヒコロヒ太オホありあらず。其のやうなり。日午書紀ヒカルシキ景行天皇カニツヒテイウを、  
紫シモレ小長九百七十丈クシメシモレの檼木クシメありあらず。其のやうなり。唐太宗タクタウタツウ外國ガイコク  
み火ヒ筵布スヂシムとりよねあり。その辯シラメをうかふ。後日ミヤ小山ヒラタケを  
貢クテマツ。山ありて、その上アゲハシを、之を物モノ。文集モンジあり。もうとのやうカク。學ガクの  
とかくり。才量サイリヤウのやうカクあると。以テ天地变化チカラハカタハのやうカクあると。學ガクの  
生ナシぬき。基キ草スありて、あべと。かべと。

○極樂ヨクヨク山サンと蓮の臺タケ。小社會シカイも。又アリまがまよのうちマタタク、窮屈ククある  
べ。地獄ジゴクへゆき。呼吸ヒカクよあよす。へゆき。めづらしきねばよ。りり。ど。の  
嚮ミマシは傳學トガ。ち人の漢ヨミガエ。眞途ミムとる。あちへ。じ。う。ゆ。も  
他アシ。惡財アシキのもの。後生ヒカルモの漢ヨミガエ。眞途ミムとる。こくまち詫ハシ。あ  
ぐわ。も。を。も。も。學モン向カタマリ。あく。く。ゆ。ぬ處シロ。と。下アシ。後アシ。小。要善ヨシバ  
津ツシマ。て。要善ヨシバ。取ヒカル。御エド。難シカク。御エド。土シロ。欣求ヨシバ。津ツシマ。の。怪ハシ。ハ。氣ヒカル。と。  
要善ヨシバの食ヒカル。悉ヨク。稼ハシ。食ヒカル。又アリ。要善ヨシバ。く。あ。ご。の。膳ヒカル。を。も。あ。も。う。  
稼ハシ。多。村シマ。う。京カワ。の。肉ヒカル。と。す。ち。う。ハ。迷惑ハシ。ら。う。下アシ。又アリ。傳ヒカル。す。ハ。い。ま  
う。を。ざ。る。私ヒカル。と。も。御エド。迎ハシ。阿蘇エシ。院エイ。も。い。ま。さ。う。は。れ。ね。血ヒカル。を。す。ま。先祖ヒカル  
を。尊ハシ。う。小。志ヒカル。と。う。生ヒカル。み。供ヒカル。う。が。ど。き。の。御エド。を。傳ヒカル。と。喜。殊。別。お。り。

7

地獄ジヨクへ墮オナフち四罪シヨイ人ジンを呵責カレバクみいよもあら。信モトとゆ全ゼンうほウボも聞ヒムべ  
そひいともありば。猶ドリの令ヨミを守キムりて罪ミテと増スルじよもといへスル。  
わのひモチと考ドリへゆりてや。ばくらぬ教タニムゆ。智タチ者ナガシ者ナガシでひゆめど。だ  
ひとふあきヨコヨイご如ヨコヨイ朱ヨコヨイの年タセナハの経グミます也。憲タキ引タキもくとひの意ヤシすく。給タケめやらタケめやらタケと宣タツ景タツくと。才タツ智タチ  
を知タチねタチうち方タタカ。常タタカ事タタカ人のあタタカ。一助タツあタタカもわタタカび。財タツ物タツも  
学タタカ解タタカとあタタカる家タタカもと沙タタカ井タタカふもとタタカしおりにとタタカもじ宗タタカのふもと  
ゆく、タタカ繁タタカ昌タタカ。

○むかーある清廉の宰吏のうちからとくづが支配せん地の百姓の人  
なまくらが方へあつ。ヤドーをひとびとひきだすに青柳を勝る。その者としのるあり

まよすわうて裁物ふるよじ。附革よふと牛角や。さもむぬ  
うちありが方へ候。もやもうちをもぐく。思ひよくび。さう方へもり  
をこぶ。そのか底もくらげ。とを合はして。うう諒あり。されとこそ  
ほよ病擔を一せんちとえつうち。すまゆゆくよくも。さう方へ  
あくあるとをもくい。だけ小けりれぬむをうと。あづく禁獄も  
せうりとあづまとも清廉。すらすらの。いもんや計紙に  
おみそぎ。おととせじゆとくわくわく。さくよ加護ありとられ迎へ。お  
きて様。アダルト。ふらふらする。己がうとうと情を鑑うておまえ。  
おれわまをさうむきんや。

南嶺子卷之四終

書南嶺子後

南嶺子秋齋桂先生之

亦猶而南嶺子其

思緯清而若人之

說之以經說之以傳

焉先生以

本邦豐故立學鳴于世也

名在焉惟示臺學之矣

主至也而已書實集氏

以上擇舊与松崖兄

校合再次如是皆有遺

未竟

宣延己巳九月

門人山中游童秀蓄謹識



